

## 『出張で女上司の身体に欲情したら、ホテルで毎日犯されるようになった僕』

高橋悠真（25歳）は真面目で几帳面な営業部新入社員だった。女性経験が少なく、欲情を強く抑え込む性格だ。

入社半年目のある日、神崎怜華部長（34歳）から突然「来週の大型案件で2泊3日の出張に同行しろ」と命じられた。

怜華は社内で「氷の女王」と恐れられる美人部長。冷徹で厳格、完璧主義者だが、その容姿は圧倒的だった。豊かな胸、くびれた腰、長い美脚、男性社員の憧れの的でもあった。

出張前の一週間、悠真は緊張と葛藤の連続だった。

怜華に毎日呼び出され、資料確認や打ち合わせを繰り返すたび、彼女の胸元が開いた

り、脚を組み替える仕草に目が吸い寄せられてしまう。

夜、家に帰ると怜華の身体が頭から離れず、罪悪感と興奮で眠れない日々が続いた。

当日、新幹線の中で悠真は怜華の隣に座っていた。

怜華はタイトなビジネススーツを着ており、脚を優雅に組むたび、黒いストッキングに包まれたむっちりとした太ももがチラチラと見える。ブラウスのボタンが張り、胸の谷間が強調される。

怜華が少し前屈みになって資料を指差した瞬間、胸元が大きく開き、白い肌とレースのブラジャーが見えた。

悠真は慌てて目を逸らしたが、股間が熱く疼き始めていた。

ホテルに到着し、チェックインを済ませた夜。

悠真は怜華の荷物を運ぶために彼女の部屋に入った。

その瞬間、怜華がシャワーから出てきた。バスローブの前が緩くはだけ、濡れた黒髪から滴る水滴が、白く輝く胸の谷間をゆっくり伝い落ちていく。重みのある乳房の柔らかな膨らみ、淡く尖った乳首の輪郭、くびれた腰、滑らかなヒップ、そして長く艶やかな脚……。

悠真の喉が鳴り、視線が釘付けになった。出張前から何度も想像していた上司の身体が、目前で生々しく晒されている。股間が一瞬で熱く硬くなり、ズボンが痛いほど圧迫される。

「部長……見ないで……」

怜華は悠真の視線に気づき、薄く妖しい微笑みを浮かべた。

「高橋君……私の身体を、そんなに熱い目で見つめて……どうしたの？」

彼女は悠真の手を取り、自分の熱く柔らかい乳房に導いた。

「触りなさい……欲しかったんでしょ  
う？」

怜華は悠真のズボンを下ろし、痛いほど硬くなった肉棒を細い指で包み込んだ。  
熱い掌がゆっくり上下に動き、先端から溢れる透明な液を丁寧に塗り広げる。

「ん……熱くて、硬い……本当に欲情していたのね」

怜華はバスローブを落とし、完璧な裸体を晒した。  
彼女は悠真をベッドに押し倒し、自分の身体を重ねた。  
熱く濡れた秘部を肉棒に擦りつけ、ゆっくりと腰を沈めていく。  
狭く熱い肉壁が根元まで飲み込み、きつく締め付ける。

「部長……入っちゃ……あっ……！」

怜華は腰を激しく前後に振り、豊満な乳房を激しく揺らしながら悠真を犯した。

汗で滑る肌が密着し、淫らな水音が部屋に響く。

彼女が上になったまま深く繋がり、激しく動き続け、悠真は堪えきれずに彼女の最奥へ熱い精液を大量に注ぎ込んだ。

「くっ……出ちゃう……！」

しかし怜華は止まらなかった。

一度目の射精後も、彼女は腰の動きを緩めず、むしろさらに激しく前後に振り続けた。

熱く濡れた秘部が精液でぬるぬるになりながらも、悠真のまだ硬さを保った肉棒を何度も締め付け、掻き回すように動く。

「部長……もう……敏感すぎて……！」

怜華は豊満な乳房を揺らしながら腰を振り続け、悠真の敏感になった部分を執拗に刺激した。